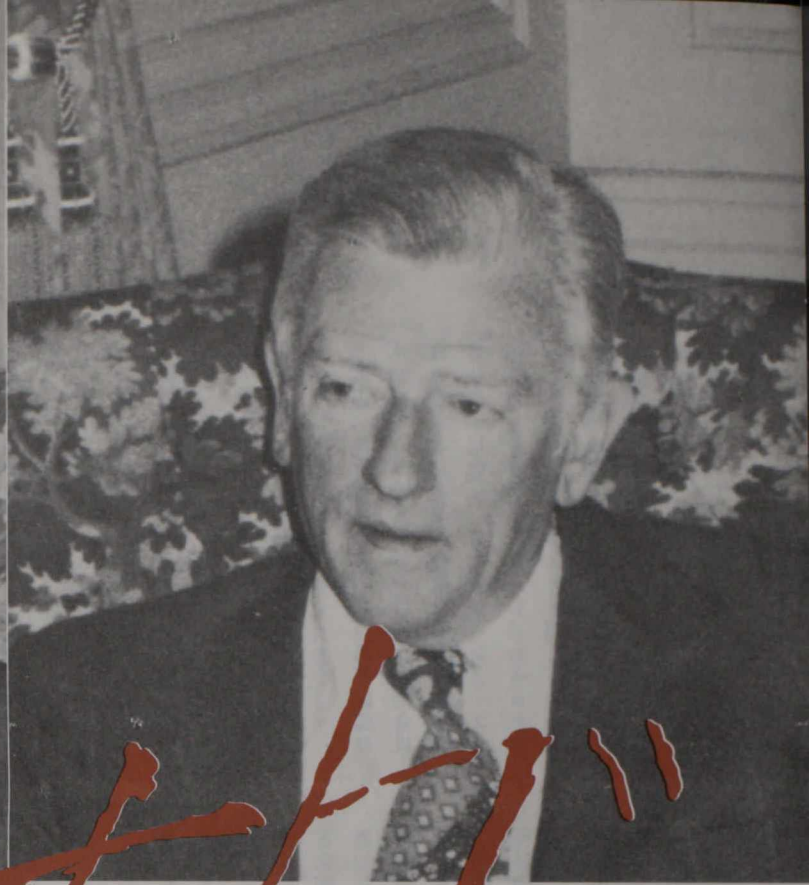
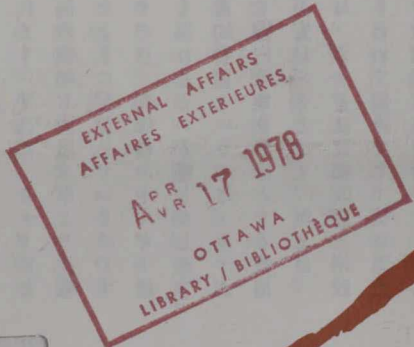


CA1
EA947
B71
#16 Jan. 1978
DOCS



対談

1978年1月
No.16



対談・日加関係を語る — 2
 駐日カナダ大使 ブルース・ランキン
 日本経済新聞論説主幹 武山泰雄

勢いを失ったケベック党 — 10
 トルドー首相が見解

書評 — 11

トピックス — 12



●新春対談

日加関係を語る

駐日カナダ大使 ブルース・ランキン
日本経済新聞論説主幹 武山泰雄

最近、日本とカナダの関係は、とみに重要性を増して

参りました。特に経済関係は著しく成長しました。こ

れはもちろん喜ぶべきことですが、半面、日加双方に

いろいろと懸念される問題もあります。そこで日加関係

がさらに発展するよう、そういう問題を含めてざつ

ぱらんにお話しさせていただきたいと思えます。日加関係はも

ちろん貿易だけにとどまりません。政治的、あるいは文

化的関係も活発になっております。そういう側面について

も、お話しいただければ幸いです。

—— 広報部

転機を迎えたカナダ

大使 武山さんは昨年夏、カナダへ行かれたわけですが、カナダの印象はいかがでしたか。

武山 カナダへは日本の経済使節団のメンバーとして、あるいはほかの機会に行ったことがあり、今度は四度目の訪問でした。しかし、アライアツ・ジュ・コロンビア、オタワ、トロント、ケベック、シナイと、いろいろな所を訪問したのは、今回が初めてでした。特に家内にとって

は初めてのカナダ旅行で、大層喜んでおりました。今年度の訪問はわずか二週間と短期間で

したが、前に訪問したときと比べてお国

が大きく発展していることに感嘆しまし

た。と同時に、カナダが経済的にも、政

治的にも、あるいはいろいろな意味で大

きな転機を迎えているという印象を受け

ました。カナダが、現在、苦しい自己再

評価の渦中にあるのではないかと、この

とです。

大使 わが国は、どうもそういう自己

再評価の時期を何度も何度も迎えるよう

です。

武山 なぜそういう印象を受けたのか

考えてみたのですが、どうも一つには時

間的な要因、もう一つには構造的要因が

あるような気がします。一番目の要因に

ついて申しますと、石油危機以来の国際

的政治・経済状況の変化に対する調整に、

カナダが遅れをとったのではないかと

いうことです。例えば、カナダの国民が、

最近まで自分たちの将来や生活水準に対

してあまりに高い期待をかけていた

ように思われます。それに、カナダにお

ける石油の国内価格も国際水準より比較

的に低かったように記憶しているのです

が、どうもその点、高価格エネルギー経

済への調整も遅れたという感じがします。

一番目の構造的要因というのは、カナダ

の政治構造や国内政策を原因とする政治

的、経済的不安定のことです。例えば、

私の印象では、カナダは連邦政府と州政

府の関係がきわめて複雑です。特に天然

資源に関する政策決定の分野でそうだと

いう気がします。私がアルバータ州にい

たときのことですが、その炭鉱経営者

は政府の石炭政策のせいで、自分たちの

開発計画がすでに二年も遅れた、とこぼ

していました。そういう複雑な州・連邦

関係は、どうも英国による植民地支配の

遺産ではないかと思えます。私の誤解か

もしれませんが…つまり、州政府に

大きな権限を与えれば、英国としてはカ

ナダ全体の操縦がし易くなる、というこ

とですが、間違っていたら正して下さい。

この構造的、国内政治的問題に関連す

ることですが、もう一つの不安定要因と

して政府と経済界がうまくいっていない、

かなり敵対関係にあるということが指摘

できると思います。ピクトリアでもカル

ガリー、あるいはトロントでも、経済界

の人たちはみんなな政府と経済界の仲が悪

いとぼしてしましました。これではカナダ

の市場経済の将来が心配されます。一部

の財界指導者も、カナダの市場経済の先

行きに深い懸念を抱いています。これ

も強く心に残ったことです。さらに、労

働組合幹部が経営者を敵視し、現実

対して目をつぶっているのではないかと

いう印象を受けました。もう一つカナ

ダの経済人が強調していたことは、カナ

ダの経済規模からすれば、現在の労働賃

金は米国の八割程度に下げるべきだ、と

いうことです。カナダの賃金水準が高ず

きるといふのは、周知の事実であります。

結局、カナダが構造的要因および国内

政策による不安定に直面し、大きな転機

を迎えているのではないかと、という印象

を私は受けたわけですが、そこでお尋ねし

たいのは、ごく大まかな質問になります

が、どういう政策あるいは構造転換をカ

ナダ国民は求めているのだろうか、とい

うことです。

大使 とても興味深いお話です。しか

も、大半は反論しがたい内容です。確か

に、カナダはほとんどの国より遅く世界

的不景気に仲間入りしました。気を許す

べき時でないのに安閑としていた、と言

えるかもしれません。例えばエネルギー

価格について、国内に何らかの形でエネ

ルギー資源が豊富にあるということ、

石油危機で世界中が大騒ぎしているとき

にカナダ人はそれほど深刻に考えていな

かったように思われます。石油の国内価格

は、現在でも国際価格を下回っています。

輸入石油への依存度が高まり、在来石

油が徐々に減少していくにつれて、国際

価格にだんだん近づいてきてはいますが

…。余談ですが、最近、すぐにも採

掘可能な良質の油田が見つかりそうだ

ということが、アルバータ州のウエストベ

ンビーナーで分りまして、カナダの在来石油の埋蔵量はわれわれが考えていたよりも増えそうです。

さて、武山さんが指摘された諸問題について、私の考えを申し上げますと、カナダには去年よりは今年、今年よりは来年が良くなるという期待感がある、ところが世界的不景気の中でそういう期待感を維持するのは難しいことだ、というのはおっしゃる通りだと思います。カナダのように、完全に貿易収入に依存している国にとっては特にそうです。わが国の国民総生産（GNP）に占める貿易依存率は、実に二五パーセントにのぼります。ですから、世界的に不況になり、カナダの主要な輸出相手国がその影響を受けますと、わが国としてはお手上げになるわけです。昨年の輸出はかなり順調にいったようですが……日本と似て、カナダ経済の最も健全な部分は輸出だと言えるかもしれません。今年はどうなるか、あまり樂觀はできませんが。

政治的不安定についてですが、これはわが国の特異な連邦制によるものです。ご承知のように、カナダの国土はあまりに巨大で、中央集権化した政府によってこれだけの国を治めるのは無理です。一八六七年の憲法によって、州は一定の権限が与えられました。州はこうした権限を固守しています。カナダでは、こうした状況をどういう風に変えるべきか、現在、連邦政府と州政府の間で広く討議されています。特にケベックの現状について、何らかの変更が加えられるでしょう。わが国の憲法（英国領北アメリカ条例）の「カナダ化」をどう進めるか、それをどういう風に修正していくかについて、

大幅な検討がなされています。武山さんはケベックにも行かれましたね。

武山 残念ながら行ったのが週末で、レベック首相にも誰にもお会いする機会がありませんでした。私の個人的感じとしては、ケベックが分離するのは、ケベックにとつても、カナダ全体にとつても経済的に大きな損害です。ケベックが連邦にとどまるよう、何とか折り合つて欲しいですね。

大使 私はそのうなると思います。ケベック党が選ばれたからケベックの分離は間違いないと考えるのは、当ってないと思います。分離はないでしょう。

武山 ケベック州から企業が州外に転出しているようですね。

労使関係に改善の兆し

大使 そういう動きは、ケベック州の経済を弱め、州住民の不満を一層高めるだけです。

ところで、先ほどの話に戻りますが、アルバータ州の石炭について、連邦政府の政策のせいで石炭政策の策定が二年も遅れた、炭鉱経営者の皆さんがそういう苦情を呈していたとのことですね。これは実はアルバータ州政府の政策でして、連邦政府の政策ではないんです。アルバータは石油および天然ガス資源が非常に豊富で、州政府には石炭を急いで開発しようという気はありません。むしろ、天然ガスや石油が少なくなつたときに備えて、石炭はそのまま地下に残しておきたいというのでしよう。州政府の政策で高いロイヤルティー（鉱区使用料）——トン当り最高八ドルというスライド制の税金

を課しているのは、そのためです。

大半の石炭はそれよりかなり低いロイヤルティーが課されるわけですが、それにしてもお隣のブリティッシュ・コロンビア州のトン当り一ドル五〇セントとは相当の差があります。アルバータ州とは違って、ブリティッシュ・コロンビア州には石油も天然ガスもそれほどありませんし、アルバータ政府のような石炭の開発抑制は考えていないわけですね。いずれにしても、アルバータ州の石炭開発問題は同州政府の石炭政策によるもので、連邦政府の政策によるものではありません。カナダの過去との繋がりについて申し上げますと、確かに植民地時代の名残りはみんなもっているかもしれませんが、それほど強調するようなものでもないと思います。カナダの現在の諸問題はカナダ自身が作り出した問題です。カナダが英国の指導あるいは支配から抜け出したのは、ずっと前のことで、当時のことを覚えている世代はもうおりません。現在の英国との繋がりは、政治的というよりはむしろ兄弟関係のようなものです。政府と経済界の仲が悪いというのは、おっしゃる通りでしょう。私自身も、カナダへ帰つてこの冷たい関係を直接見聞しました。ただ、それは変わりつつあります。政府は経済に対するいわゆる「介入」を避ける傾向にあります。ただ、過去二、三年、カナダを旅行して——特に七六年九月に東岸から西岸まで横断して——得た経験からしますと、経済人というのとは、どんなことでも決して自らを責めることはない、と言えらると思います。生涯のうちで一度でも間違いを犯したことがある経済人に会つたことはありません。



不運というものは、誰か他人によつてもたらされるという考え方は、カナダの経済人というのは、ある一定の状況に対して、ほとんどいつもそういう風に反応するわけです。一九五〇年代頃には、政府と経済界とは非常にうまくいっていたのですが、どうもそれがだんだんと崩れていったようですね。しかし、政府、経済界とも、現在は、よりを戻そうと一生懸命に努力しているようです。武山さんが指摘するように、わが国はいろいろな面で転換期にあると思いますが、これはそのひとつでしょう。中でも特に私が常に最大の関心を寄せているのは、カナダの労使関係です。私はこの問題について非常に心を痛めており、そろそろ新しい労使関係のあり方を誰かが見つけてしかるべきだと思つていますが……。労使関係

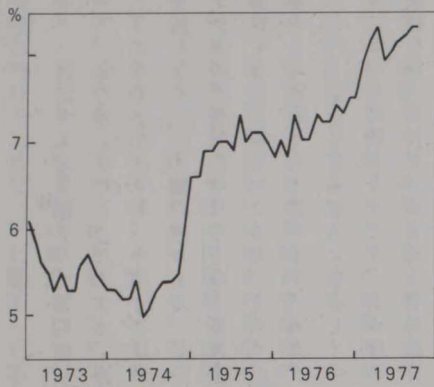


はいがみ合いの状況になりましたからね。ただ、ここ一、二年、双方に——特に組合側から——歩み寄りのきざしがいくらか見えてきました。インフレ対策室の諸指標や高い失業率などは、経済がそういつまでも伸び続けるものでないことを示しています。労使関係はもっと良くなつて欲しいですね。日本では、政府も経済人も労働者も国益というものを非常によく理解しておりますので、カナダの状況は解せないかも知れません。私自身、何かいい即効の解決法があればいいのですが、どうしたらいいのか……。あるいは教育的なものかも知れません。実は、その「教育」は現在、あるていど行われているのです。二、三カ月前のことですが、

日本に輸出しているカナダのある大手業者が日本の業者と商談に来た際、組合関係者二人を伴ってきた、ということを知りて嬉しく思いました。

武山 それは仲々いいことですね。
大使 二人は日本の商社の案内で、日

失業率



本全国を回り、自分たちと同種の産業を見学した、という話です。これはきわめて賞賛すべきことで、もっともつとつこう機会を増やして欲しいですね。

カナダの賃金水準については、どうも神話化されている気がします。アメリカとカナダの賃金が比較される場合、いつも基本給だけが比較されて、(保険などの)諸手当は計算されません。カナダにはアメリカの労働組合員が当然得ているのと同じような諸手当がありません。ですから、高賃金というのは、それほど理不尽ではないと思います。カナダの賃金水準は、これまでアメリカの水準の八〇パーセントぐらいでした。世界一裕福な国の隣りに住む国民に、お隣りよりいくらか低い生活水準で我慢してもらいよう期待するのは、むずかしいことです。カナダの賃金水準がアメリカの水準と均等になり、しかも国内で消費するには過大の資源を生産する主要国としてのわが国の特異な立場にふさわしい生産性を維持できる限り、またわが国の人口規模やその散在性による狭小市場に割り高な生産コストといったようなことを考えますと、賃金がある程度高くてもいいのではないかという気がします。誰でも、経済が許す限り、高い賃金をもらったほうがよいでしょう。世界的な不況によってこれは難しくなつたでしょうが……。ただ、カナダ・ドルの米ドルに対する価値下落——これは大分落ちついてきました——によって、状況はいくらか改善されたようです。産業によっては、アメリカと比べてもひけを取らなくなつたと、ファイナンシャル・タイムズも報じていました。インフレ対策室が設置され、

物価・賃金抑制策が導入されたのは、経済実態に比べて労働者の要求が大き過ぎたからですが、労働者側はこうした規制を立派に受け入れました。昨年の抑制基準は六パーセントで、インフレ率を下回るでしょう。

ですから、武山さんのご感想は全般的を得ているのもありますし、強調し過ぎているところもあります。輸出国として、わが国だけではどうしようもないものもあり、また武山さんが訪問されてから変わったものもあります。とにかく、状況は変化しています。政府——とりわけクレチエン大蔵大臣——の新しい方針は、経済界がやるべき領域に政府が介入し過ぎないようにする、ということのようです。

武山 いろいろなこと——特にアルバータ州の石炭政策やカナダの賃金水準、あるいはクレチエン蔵相の方針——がこれでよく分りました。クレチエン蔵相の経済報告によりますと、カナダの貿易収支はかなり好調で、黒字は二十億ドルに迫っているということ、これは確かにいいニュースですが、やはり先ほど申し上げましたように、カナダは試練の自己再評価期に現在直面している、というのが私の偽りのない印象です。これと表裏一体して、国民が現実を直視し、それに対応しようとしているという、心強い態度ももうかがえました。例えば一九七六年十月に連邦政府は「明日の展望」と題する文書を発表しましたが、政府はこの文書を準備するに当たって、建設的な意見や提案を募っている。これはとてもいいことです。また私のカナダ滞在中にいろいろな指導者が行った演説も仲々しっか

りしてました。例えば(辞任直前の)マクドナルド大蔵大臣が去年の九月、サスカチュワン州で「現実に対応せよ、これ以上期待感を高めるな」と国民に強調した演説などは、非常に印象的でした。また、お読みになったかどうか分りませんが、十一月十六日のグローブ・アンド・メール紙で、同紙の発行者マローン氏が一ページをさいてカナダの現況を分析し、カナダが解決しなければならぬ問題は何か、具体的に指摘しています。マクドナルド前蔵相、マローン氏、その他の指導者の発言というものが、きわめて啓蒙的な役目を果たしているんですね。さらに、私がビクトリア(ブリティッシュ・コロンビア州の首都)にいたときですが、国際産労働者組合がスト中止、年間昇給七パーセント等を盛りこんだ二年間有効の労使契約を結んだことを聞きました。

かなり穏やかな内容で、これは組合側も現実に対応しなければならなくなつたからでしょう。ブリティッシュ・コロンビア州などでは、労働法を改正する動きも出ています。ケベック州でもそういう話が進んでいます。いずれもいいことです。労使関係というカナダで最も深刻な問題を、カナダはうまく改善して欲しいですね。早ければ早いほどいいと思います。徴候としては、期待していいでしょう。
大使 同感です。改善への歯車はすでに回り始めています。
ところで、カナダの貿易収支は黒字だと武山さんはおっしゃいました。できればそうあつて欲しいのですが、実は残念ながら国際収支はかなりの赤字なんです。
武山 そういえば、貿易外勘定の観光収支が大赤字ということ……。

大型プロジェクトで 経済効果

大使 そうなんです。観光収支は貿易外勘定の中でも特に悪く、その年間赤字額は実に十五億ドルに達しています。これは大きな心配の種になっておりまして、議会でもどう対処すべきか、討議されています。どうも奇妙なことですが、カナダでは国内航空運賃が比較的に高くて、フロリダやカリフォルニア、ホノルルなどへはどちらかと言えば安く行ける。運賃が比較的安いので、人々はそういう暖かいところへどんどん行ってしまおう。

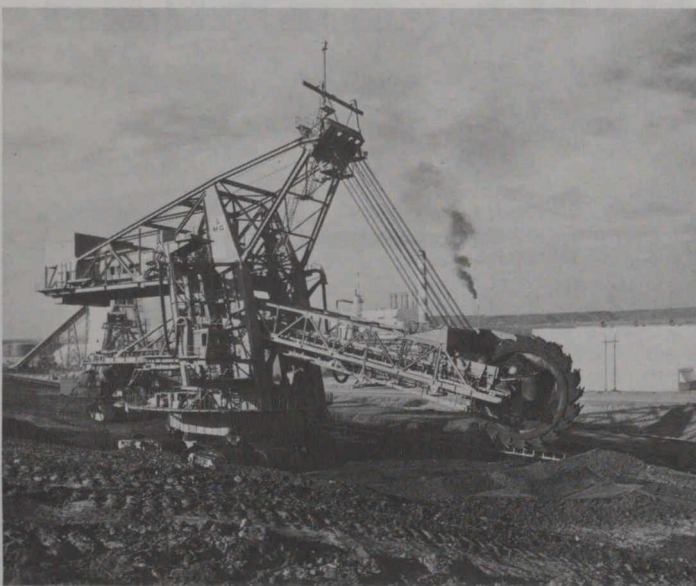
ただ、カナダの将来については、いくら楽観できると思います。現在、いろいろな大型プロジェクトを進めようとしており、これらは大きな刺激要因になるでしょう。例えばアルキヤン・パイプライン・プロジェクトです。全長四千キロというこのパイプライン建設計画は、単に北極海から天然ガスを輸送するというだけでも、また膨大な量のパイプラインの供給が必要、というだけでもありません。サービス関連産業全体が、ひとつのプロジェクトとしてはカナダ建国以来最大の事業に取り組む——これが一番重要な点です。その効果はきわめて大きいと思いますね。エネルギー庁はパイプラインをアルキヤン工場のあるキティマツト（バンクーバー北方）まで延長し、エドモントンで既設のパイプラインと接続する案を提出しています。これも大型プロジェクトです。そのほか、ケベックにおけるジェームス湾電力開発計画——これは総額百五十億ドルをかけて出力一千万ワットの水力発電所を建設する計画で

す——も軌道に乗っています。エネルギーについては、わが国の将来は比較的に明かるいですね。

武山 日本と比べて、カナダはその点、非常に幸運ですね。

大使 フロンティア地域の石油や天然ガスを利用できるまでには、あと五年ないし十年かかるかも知れません。その間に、南部カナダでもっと在来形態の原油を発見できないと、多少苦しくなる恐れがあります。ごく最近、アルバータ州で有望な油田が発見されました。石炭は、今後何世紀も国内需要を満たし、かつ輸出する余力があります。また、ご承知のように、オイル・サンドの開発については、日本側と話し合っています。カナダ石油公社（ベトロ・カナダ）のホッパー総裁が昨年暮れに来日し、オイル・サンド開発について日本側と協議しました。カナダでは、ベトロ・カナダ、シ

ティ・サービス・カナダ、インベリアル・オイルが、コンソーシアムを設立、アルバータ州アサバスカの鉱区（約五千平方キロ）でオイルサンド開発事業計画（参加社の頭文字をとって、P C Iプロジェクトと呼ばれる）を進めています。これに日本側が出資し、二五パーセントの鉱区権・生産原油権を保有する条件で参加を要請しました。大いに期待できそうです。アサバスカのこの鉱区では、およそ千六百億バレルの原油が確認されており



アルバータ州アサバスカで掘削が進められているオイルサンド

（世界の在来原油の確認埋蔵量は、約六千二百億バレル）。これは長期的なプロジェクトで、実際の生産体制に入るのはい九九〇年代に入ってからのことです。それまでにオイルサンドの地層内回収法の確立など、技術開発を急がなければなりません。

武山 問題はやはりコストでしょうね。オイルサンドから石油を抽出するには、莫大な金がかかる……。

大使 いやいや、現在の石油の国際価格からしますと、オイルサンドの開発コストはもはや高くないんです。抽出技術を改善して、さらに経済性を高めることも期待できます。

このように、われわれの前途には、大型でしかも有望なプロジェクトがいろいろ並んでおりまして、これらは経済全体に好ましい波及効果を及ぼすでしょう。

ただ、失業率八・二パーセントというのは深刻です。どうも、インフレと失業が一緒になって、一方に対する薬は他方に対して毒となる、経済史の上で特殊な時期にめぐり合わせたようですね。

武山 残念ながら、すべての先進工業諸国は、いわゆるスタグフレーションに陥っているようですね。

大使 ただ強調しておきたいのですが、そのために苦しんでいる人は一人もいないですね、カナダには。社会保障制度が行き過ぎと言われるほど整備されているからです。失業保険の給付率は高いし、乳幼児手当、老令年金、カナダ年金、必要に応じた諸扶助など、いろいろな制度もできています。

それでも、個人的に——純粹に個人的に申しまして——八・二パーセントという失業率のことはやはり心配ですね。しかし、カナダの失業率がそんなに高いとは信じられません。統計のとり方に問題があります。例えば外で半年間働いた主婦が、子供を生むための理由でやめても、統計上は失業者として数えられる。成熟した——あるいは未成熟のといいますが——社会になったため、仕事はちゃんとあるけれども、人々はそういう仕事につきたくない、という場合もあります。事実、私が帰国して会った多くの友人は、働き手が足りないといはしていましたよ。

武山 大学新卒など、若者の失業率はいかがですか。

大使 よくないですね。これは一つには経済成長が追いつかず、若者を吸収しきれなかった、ということもありますが、それだけでなく、最低賃金制も雇用の壁になっているようですね。



武山 全くその通りだと思います。非常に重要な点ですね。これはインフレーションの一誘因です。

大使 カナダでは、夏期休暇になると、大学生もアルバイトをして、労働力に大いに寄与していたのですが、彼らにも最低賃金を支払わなければならないようになったため、学生を雇うことが難しくなりました。チップが必要なサービス業の場合も同様です。ウェイトルスを雇うと最低賃金を払うだけでなく、ウェイトルスが多すぎると、チップの分け前もそれだけ減るといふことで、組合も文句を言っています。同じような問題は日本でもでてきているようですね。

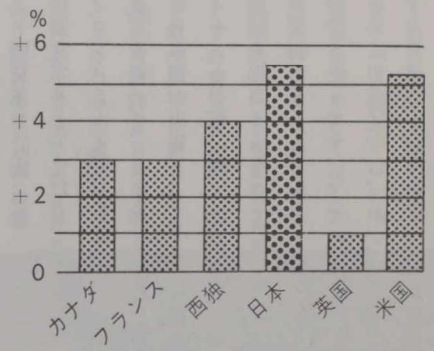
武山 いいことか、悪いことか知りませんが、日本も他の先進工業諸国に追いついてきているようです。

日本に必要な

産業構造の転換

大使 いろいろな面で、日本は他の国々をしのいでいますよ。日本の奇蹟については、世界全体が感心しています。ただ、そういう高度成長が永遠に続くものと考えていたんでしようね。日本にきてまだ二年にしかありませんが——もつと長く滞在しないと日本を詳しく知ることはできないということも承知しているのですが——日本の産業の中には、度を越すというか、生産能力をむやみに拡張する傾向があるようですね。その一例が造船だと思ふのですが、最盛期には誰も二年先にどうなるか考えようともしなかった。需要は常にあるとみんな思っていたのが、今や需要は大幅に減り、施設は過剰になってしまつた。

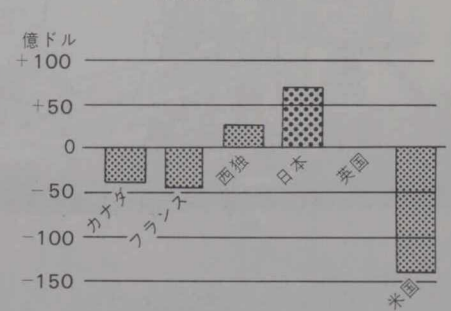
主要各国の実質経済成長率
(1977年予測)



それよりもつと緊急の問題は、特に米国と欧州共同体に対する大幅な貿易黒字ですが、これについては今年いっぱい、あるいはここ一、二年は少々悲観視しています。大幅黒字を減らしていくか、日本市場をもつと開放するか、それ以外に解決法はない感じがします。流通システムを若干変えるとか……。しかし、円高と主要貿易相手国から受けてきたいろいろな圧力を考えると、どうしても楽観的になれないですね。どうしたらいいか、私などには分りませんが、再びインフレーションを招来することなく景気を再浮揚させるようないい方法が見つかってくれればいいですね。

武山 人間というのは保守的で、中々環境の変化に応じて変わろうとしないですね。ご指摘のように、日本の経済は一九七〇年代になつても、一九六〇年代と同じ外的、内的環境にあるような錯覚をしていた。造船だけでなく、繊維にしても、化学工業などにしてもそうです。二年、三年、あるいはもつとかかるかも知れませんが、日本は産業構造の転換をしなければだめですね。過剰生産能力を削

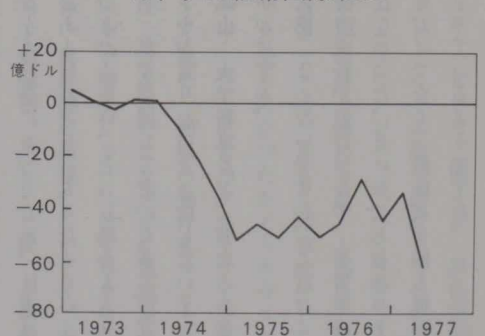
経常収支
(1977年推定)



らなければなりません。一九六〇年代の初めに、炭鉱閉鎖など、きわめて大規模な産業構造の変革を行いました。鉱山労働者や経営者にとつては、いろいろと苦労も多かったのですが、高度経済成長の時期であつたため、とにかくやり遂げることができました。現在では状況も変わり、非常にやりにくいとは思いますが、産業構造の再編成はぜひ必要です。日本はまだ国内需要を拡大する政策をとるべきですが、国際収支の改善などについては、ロッキード事件やらで取り組みが大きく遅れてしまいました。政府は資金投入によつて国内景気の再浮揚を図るべきですよ。ただ、外国は日本に矛盾したことを要求しています。例えば、一方でできるだけ経済成長を高めよと主張しながら、円をできるだけ高いレートにもつてゆけ、という……。われわれは均衡を保たなければなりません。私としては、七八年度の経常国際収支が七七年度のおよそ半分になれば結構だと思います。そうしないと、円は二二〇円まで引き上げられる恐れがあります。

大使 カナダ・ドルはすでに二二〇円

カナダの経常国際収支



を割っています。……いろいろなことを同時にやるのはむずかしい時期ですね、今は。日本は現在の大黒字を赤字にせよ、なんていわれているのですが、これは不可能だと私は思いますね。

武山 いついつまでにある目標を達成するというのは、どういう国にとつてもほとんど不可能です。米国に対して、一定の期限までにどのレベルまでドル価を安定させてくれといつても、そういうコミットメントは米国もしくいんですよ。

閉鎖的な日本市場

大使 ただ、少なくとも日本市場をもつと開放してもらいたいという点では、他の主要対日貿易相手国と同意見です。関税の引き下げ云々といつたつて、その大小に関わらず、私はあまり喜ばません。私が気にしているのは関税ではないんです。気にしているのは、法令に明記されていない衛生とか電気に関する基準といった、いろいろな規制あるいは流通機構など、すなわち非関税障壁です。

武山 ちょっとお待ち下さい。非関税障壁というのは、一体どういうことだし



武山 なるほど。

大使 再検査の問題は解決したいですね。日本の検査官にわれわれの費用でカナダに行ってもらうようになるかも知れません。これは問題解決の一つの可能性だとわれわれは見ております。ツーバイフォーには四×八インチのブライウッドが壁材や床材として使われます。ところが日本では、それを三×六インチに切って使うんです。畳の大きさと、日本では標準サイズですね。しかし、ツーバイフォー建築では四×八インチでなければいけないのです。これについては非常に苦心しています。それから日本に輸出されるモミ（スプルース・パイン・ファール）に対する一〇パーセント関税の問題があります。日本は深刻な住宅難だ、とみなさんおっしゃっています。カナダはツーバイフォー工法できわめてすぐれた住宅を作り、日本の社会的要請にこたえることができる。一〇パーセント関税は廃止すべきです。

武山 それはおっしゃる通りです。

大使 ところが、日本の二万五千の製材所のうち、ほとんどは作業員一人、鋸一つという工場です。それで農林省は、製材業者を保護しなければならない、と言うんですね。まあ、この点、カナダはいくらか悪まれています。カナダでは、何千平方キロという単位で木材を育てています。しかし木材ばかり日本に輸出せよ、といわれることはないと思います。われわれとしては、ツーバイフォーのサイズに製材した材木を輸出したい、そしてカナダ人の製材所従業員に職を確保したい、と考えています。

それから日本の畜産自給政策について

ですが、日本側はもともと多くの飼料を欲しがっています。輸入飼料に依存しながら、どうして畜産自給ができますか。ところが、カナダには飼料もあれば、何千頭もの牛を飼える大平原もある。肉はわれわれが供給したほうがずっと有利ではありませんか。これは経済的問題というよりは、むしろ政治的問題ですね。

武山 同感です。特に畜産については同感ですね。日本は現在の制度を変え、畜産輸入を自由化の方向に進めるべきだと考えます。

差別的扱いには反対

大使 ここ数カ月、私は各省大臣や経済人、ジャーナリストなどと会って、カナダは日本の主要貿易相手国の中で、日本に圧力をかけていない数少ない国のひとつである、と申し上げてきました。カナダ市場が健全であるためには、日本市場が健全でなければならない、ということと、われわれはよく認識しています。

自分の顧客を貧乏にしても何の得にもなりません。日本に原料がないことも、私は気にしています。欧州共同体が対日非難をすると、私は不安になりました。米国のそういう非難に加わり、私の不安はもっと大きくなりました。そこで、所轄の各大臣や各省の幹部を訪ねて、武山さんにお話ししたことをお伝えし、米国や欧州共同体と取り決めをするに当たってカナダを差別しないでほしい、それだけはお願いしたい、と申し上げました。まだ不安はあります。国際収支の黒字を減らすために、米国から大量の小麦を買う話があったときは、もともと気になりました。日本はカナダにとって健全な小麦

カナダの主要対日輸出品 (1976年)

原 料	単 位	数 値
石炭	百万ドル	520
小麦	百万ドル	282
銅	百万ドル	223
鋼	百万ドル	167
大麥	百万ドル	131
鉄鉱石	百万ドル	47
亜鉛	百万ドル	45
ニッケル	百万ドル	36
ケルテン	百万ドル	31
モリブデン	百万ドル	25
亜麻種	百万ドル	129
その他	百万ドル	1,636
小計	百万ドル	316
●林産品	百万ドル	121
●農産品	百万ドル	76
水産品	百万ドル	69
鉱物	百万ドル	30
金属製品	百万ドル	30
化学製品	百万ドル	1
その他	百万ドル	643
小計	百万ドル	20
●林産品	百万ドル	20
事務機	百万ドル	19
農産品	百万ドル	16
重機	百万ドル	11
乾物類	百万ドル	4
金属、水産品	百万ドル	1
化学製品	百万ドル	12
魚、その他	百万ドル	103
小計	百万ドル	2,382

総輸出額

市場です。ところが圧力が高まって、米國を満足させるために米國から二三百萬ドル相当の小麦を輸入したら、カナダの小麦はどうなりますか。

武山 どの國に対しても、差別はすべきではありません。米國もカナダもオーストラリアも、みんな同等に扱うべきです。われわれは友人を必要としています。

大使 カナダは、國民一人当りにすると、日本の貿易相手國としては世界最大だと思います。人口二億二千萬の國でありながら、自動車、テレビ、いろいろな日本製品を輸入しています。カナダ市場で日本製品はととてもよく受け入れられています。カナダが差別されるとなれば、そういうことも長続きしません。ところが、日本の新聞をみると、いつも米國のことばかりですね。

武山 それは米國が自國だけでなく、カナダとかいろいろな國を代言していると思われているからではないですか。

大使 われわれの政策を米國に作って欲しくないですね。自分たちの政策は自分たちで作りますよ。

カナダの主要対日輸入品 (1976年)

機 械	単 位	数 値
機械製品	百万ドル	426
輸送産業製品	百万ドル	419
軽工業製品	百万ドル	318
金属工業製品	百万ドル	158
化学工業製品	百万ドル	61
農産品	百万ドル	43
木製品	百万ドル	3
その他	百万ドル	97
総輸入額	百万ドル	1,525

武山 それは全くそうです。ところで、話は変わりますが、カナダの村瀬偵察機C B 100の性能は全くすばらしいですね。直接見る機会はありませんでしたが——見ても専門家ではありませんので、どの部分がすぐれているのかわからなかったでしょうが——PC 3より優秀だと伺いました。日本に話をもちかけたらいかがですか。

大使 すでにもちかけました。防衛庁の方々にも見てもらいました。

武山 キャンドゥ（カナダ製の天然ウラン重水型原子炉）については、電源開

発がかなり関心をもっているようですね。

大使 今年いっぱい、あるいは来年の中頃までに、契約できそうです。現在、地震対策のための設計変更を行っています。ただ、原子炉の建設はどかが請負うか、という問題は残っていますが……。

武山 キヤンドウやCB140以外にも、紙バルブなどの関係者の往来がふえていくようにですね。

大使 技術分野に於ける人事交流は非常に盛んですね。ついこの間も、カナダ運輸省開発研究所のエグルトン所長が日米運輸専門家会議に出席したのですが、カナダは磁気浮上鉄道（マグレブ）についての研究が相当進んでいます。この分野でも日加間の協力が期待できますね。

武山 ところで銀行法の改正はいつごろになりそうですか。

大使 現在は最終草案の段階だと思えます。私は、次の総選挙までに——今年の六月頃までに——成立すると予測しているのですが、まだずれるかも知れないし、よく分らないですね。景気の動向によつては選挙が二、三カ月繰り下げられることも考えられます。また外国銀行の営業と相互主義（カナダ銀行の日本進出など）といった国際的な側面もありますし、信託会社など、銀行以外の金融機関に関する条項も重要です。いずれも、法案作成に当って、むずかしい問題ですね。

武山 相互に銀行支店をおくのは重要ですね。日本の銀行がカナダに進出すれば、日本の製造業も進出しやすくなります。銀行法の改正は、日加経済関係に新時代をもたらすかも知れません。

大使 本当の相互主義がかなえられればいいのですが……。ご承知のように、

米国では各州に銀行法があります。連邦国家のカナダでどういう風に単一の銀行法をまとめていくか。また日本では、銀行業務に関して法文化されていない規制もあります。日本の銀行がカナダでできることは、日本におけるカナダの銀行にも認められるという、真の相互主義でなくてはなりません。

活発な文化交流

最後になってしまいました。強調しておきたいのは日本とカナダが単に貿易上のパートナーというだけでなく、その関係はもっと幅広く、また深まっている、ということですね。まず、国際的討議の場における協力があげられます。例えば、毎年九月、国連総会が開会する前に、日加双方は今後三カ月間の議題について話し合い、意見を調整します。パリにおける国際経済協力会議（CIEC）や国際

エネルギー機関（IEA）などでも同様です。カナダは、そういう点では、他の国々より活発ですね。この規模の国としては、国際舞台にはいつも積極的に参加してきましたね、カナダは。

武山 カナダの平和維持活動には、かねてから敬意を表しています。

大使 それから、文化面では、かなりいろいろなことをやっています。一月下旬にはトロント交響楽団の公演がありました。昨年十二月には、日本のカナダ研究者が第一回セミナーを催しました。学術研究の点では非常に進展していますね、両国とも。

武山 最近カナダに関するいい本の翻訳が何冊か出版されましたね。

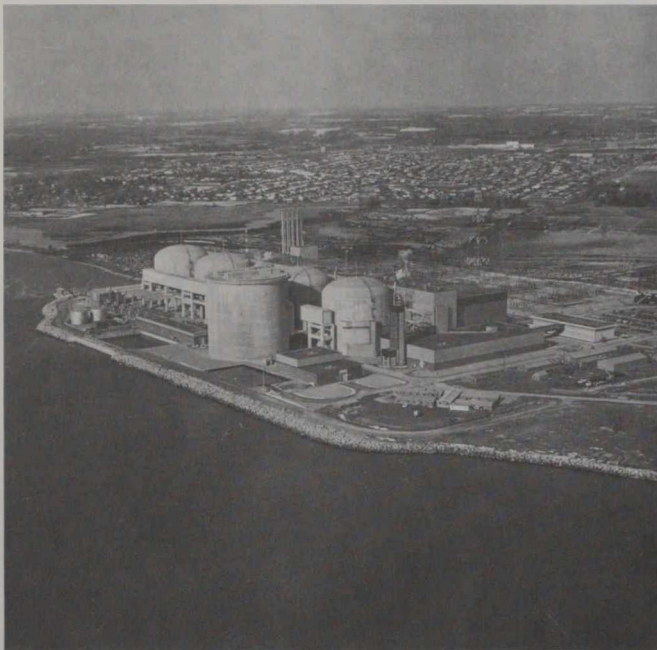
大使 絵画などの展示会も計画されています。スポーツは特に交流が盛んですね。カナダから空手チームや、バレーボール・チーム、アイスホッケー・チームも来りました。二月にはアルバータ・ホッケー・チームも来日する予定です。これはとてもいい傾向ですね。国と国との関係は、何と云っても人と人との交流、理解が一番大事ですから。

広報部 長時間どうもありがとうございました。

対談は英語でした。報告がそれを翻訳しました。

日加関係—— 昨年の主な出来事

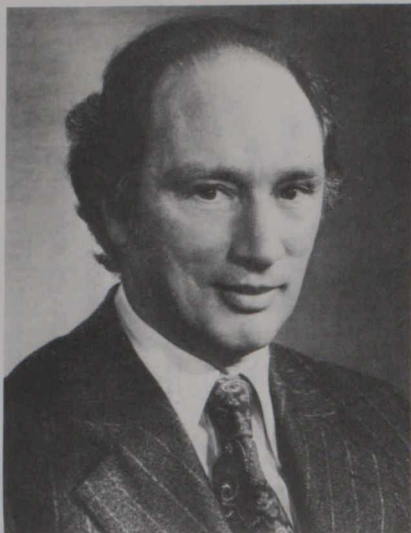
- 四月 ニュー・ブランズウィック州のゲービー財務大臣が来日。
- 四月 ジョン・ロバーツ文化大臣が来日。
- 四月 筑波、慶応両大学でカナダ研究講座が開講。
- 五月 カナダ中央銀行のアイ総裁が、国際金融会議に出席のため来日。
- 五月 カナダで日系カナダ人百年祭の主行事。
- 六月 栗栖陸上幕僚長が訪加。
- 六月 バンクローバーで日加合同経済委員会第一回会議。両国外務大臣が会談。
- 九月 訪英米加歌舞伎団がカナダで公演。
- 九月 ニュー・ブランズウィック州政府使節団（団長ハットフィールド首相、ゲービー財務大臣同行）が来日。
- 九月 オンタリオ州政府使節団（団長デイビス首相、ベネット通産・観光大臣およびニューマン農業大臣同行）が来日。
- 九月 日本から国会議員団が訪加。
- 十月 ラング運輸大臣が来日。
- 十一月 サスカチュワン州鉱業開発公社使節団（団長ミッサー天然資源大臣）が来日。
- 十二月 プリティッシュ・コロンビア州政府使節団（フィリップス通産・経済開発大臣、ウォーターランド林産大臣）が来日。



カナダで開発されたキャンドウ型原子炉

勢いを失ったケベック党

トルドー首相年頭の見解



トルドー首相

一昨年十一月、ケベック州でカナダ連邦からの分離独立を目指すケベック党が政権を握って以来、カナダではその難局をいかに打開して国家的統一を維持していくか、広く論議されてきた。ケベック問題はどのような進展を見せたのだろうか。カナダの将来は、今後、どう展開するのだろうか——。トルドー首相は一月一日、カナダのテレビ・ネットワークCTVの特別番組で、質問に答えて次のような見解を表明した（抜粋）。

● 昨年のカナダの国内状況について。一年前、ケベック党は政権についたばかりで、同党には勢いがあった。ハネムーンの期間中、その信奉者はやる気じゅう分、一丸となっていた。指導者は指導者で、カナダを分裂させようとやっきになっていた。当時、その勢いをくいと止めようとするのは間違っていたらう。重要なことは、ケベックを他の州と同じように扱い、彼らにハネムーンが終わるまで時間を与え、彼らが間違いを犯すのを待ち、それから時を見はからって適切な手を打つことだ。これはすべてうまくいったと思う。彼ら（ケベック州政府）

は、連邦政府の協力なしには経済問題が解決できないことを思い知って、いっしょに経済問題を解決するための共同案を探ろうとわれわれと協議するようになった。連邦主義はうまくいかないとする自分たちの作戦を、彼らは実証できなかった。逆には、諸州の経済問題を解決する上で連邦主義はうまく作用することを示した。

ケベック政府が（独立あるいは完全自治の立場から）後退しているとは言わないうが、連邦政府に対するその攻撃はだんだん確かさを失い、カナダに対するその攻撃はだんだん弱まっていった。一年前、彼らは州民投票をしようと言っていた。そのときは一年以内にやるのか二年以内にやるのか、われわれには分らなかつたし、州政府もあいまいだった。そんなに早く州民投票をしても、勝てるとは思っていなかったからだ。ところが、今になって、投票を二年、三年、あるいは四年も延期すると言っている。また、数年前は、「分離」と言っていたのが、「独立」となり、独立がケベック住民に受け入れられないと見るや、経済連合を伴う独立と言いつつ換えた。しかし、ギャラップなどいろいろな調査で、独立と経済連合は相入れないことが指摘されている。何人かの州首相も、ケベック州政府に対し、（同州が）独立を宣言したらいかなる種類の連合共同市場も考えるべきでない、と警告している。次に独立国家で構成する新しい連邦を言いだした。支持されるかどうか分らないが、私は支持されないとと思う。そうすると、今度はまた何か新しいことを考えるだろう。つまり、一年前の彼らには勢いがあったのに、今は受け身の立場に

おかれているわけだ。彼らの大前提はカナダとの経済連合を伴う独立であるのに、他の州や連邦政府が、「そう主張するのはご勝手ですが、国を分裂させたらもうまくはいきませんよ」と事前に警告しているわけだ。

● 二公用語政策に対する国民の態度について。

連邦・州政府協議会における各州首相の反応は、学校における言語選択の自由を確保するための措置をとる用意がある、ということだった。これは、少くとも制度的には、大きな進歩の徴候だと思ふ。国民に関しては、少数の人々は状況を現在あるいは今後とも理解しないだろうが、中部諸州だけでなく、西部あるいは東部諸州でも第二公用語を勉強できる学校に子供を送る英語系国民が増えていることから分るように、理解は深まりつつある。

● 総選挙が行われた場合、政府は国民に何を訴えるか。

カナダにおける二言語グループの役割を再評価し、理解するよう呼びかける。これはピアソン首相が始め、私が過去十年間訴えてきた概念だ。われわれが提唱した憲法のカナダ化も、国民は当初それほど重要視していなかったが、連邦政府の基本的機構を改編するその改憲も国民に提案する。また、全国民の基本的言語——すなわち、ケベックにおいて英語を選択する自由、ケベック以外の州においてフランス語を選択する自由——を保障するよう、国民に決意を迫るつもりだ。自分たちの運命を選択し、フランス語系カナダ人と英語系カナダ人が、多様な文化・多様な民族国家として、いろいろな違い

をもつ地理的統合体としてのお互いの関係を選択せざるを得なくなつたわけだ。（再選されれば）、各州の承認を得て、英国議会に対し、英国領北アメリカ条例（カナダの憲法に相当する基本法）の改定（カナダ化）を求めらるることになる。上院や最高裁判所など、州の承認なしに変更できるものもあるが、言語権などの問題については、州政府の承認を求めらるつもりだ。

● 経済問題について。

カナダの強さとその将来は、われわれの統一にかかっている。経済と統一は表裏一体だ。統一して事に当たれば、経済も強まる。統一問題に対しても、また経済問題についても、その挑戦に立ち向かう気概が一般国民や州政府の間に強まっているのを感じる。州政府も国民も、カナダ経済が成功し、競争力をもつには、自己鍛練と国内諸政府間の協力増進が必要だということ、認識し始めている。ある意味で、経済危機は、わが国の将来にとって良き選択をもたらしう。

インフレは国内的な要因で起きているわけではないが、とにかく賃上げ率は賃金物価抑制策をとる前の一九七五年前半の二二パーセントから七七年前半には年率平均で八パーセント近くに下がった。ということ、抑制策自体も良かったし、経済関係者の協力も良かったといえる。ただ、輸入価格は高いが、これはカナダ・ドルの減価によるものだ。国民は、カナダ・ドルの価値が一〇パーセント落ち込んだことは、われわれがそれだけ貧乏になったのだ、ということ、認識しなければならぬ。

「悲しみと屈辱の年月 第二次大戦中の日系カナダ人」

戦時中のカナダにおける日系(本)人差別問題について、その複雑さや内包する問題は、長い間、大半のカナダ人には比較的知られていなかった。第二次世界大戦の直後、社会学者のフォレスト・ラビオレットは著書『The Canadian Japanese and World War II(日系カナダ人と第二次世界大戦)』の中で、この問題を初めて紹介した。一九七一年には、シズエ・タカシマ(高島静江)が、収容所における自らの体験の思い出を、自筆の水彩画を入れて本にした(A Child in Prison Camp、前川純子訳「抑留キャンプの子供」)。長い家族ぐるみのキャンプ旅行のような生活に対する嬉しさと、その生活に不満な父親に対する懸念を描いた本である。そして昨年は、ケン・アダチが、長くその刊行が待たれていた『The Enemy That Never Was(敵でなかった敵)』を世に送った。この本は、日系(本)人の体験を日系市民の視点から分析したものである。

バリー・ブロードフットが今回『Years of Sorrow, Years of Shame: The Story of the Japanese Canadians in World War II(悲しみと屈辱の年月——第二次世界大戦中の日系カナダ人)』を書くに当たって使った方法は、収容生活を送った人々の思い出をテープにとり、それをていねいに編集することであった。これはブロードフットが他の著書で試み、きわめて成功した方法である。全体は三七〇ページで、匿名のインタビューを一七〇の項目に分け、テーマごとに並べてある。多くの人々が同じことを繰り返し述べているが、この繰り返しと二四ページにのぼる写真とで、ほとんどの日系カナダ人に共通する体験をコラージュにまとめ

ている。

本書を通じて、インタビューされた人々は、「どうしてわれわれが?」と問いかける。このような偏見が彼らに對してぶつけられたのは、なぜだろうか。アジア人を排斥する諸法令を作った人々の子孫は、この問いかけから身を避けてはならない。アリテイシユ・コロンビア大学の歴史家ピーター・ウォード博士は、人々の考え方や、アリテイシユ・コロンビア州民の過半数が歓迎されざる移民から自分たちを守るために作った法制との関係を研究している。この研究は、カナダがどうして罪のない、そして勤労な日系カナダ人を虐待するに至ったかについて、私たちの理解を深めてくれるだろう。

ブロードフットは、最後に、こうしたことが再び起こるかとの自問し、その可能性を否定している。「カナダはもはや一九四一年当時のカナダではない」というのがその理由である。日系人子孫の問題は、現在の傾向が続けば一世代で解決するだろう。今や日系の若者たちの大半は、日系以外の人と結婚しており、彼らの子供たちはほかのカナダ人とはほとんど識別できなくなっているはずだ、という理由からである。

しかし、インタビューの一番最後で答えた人は、同じ質問に對し、「私も(再発の可能性を)否定したいが、そうは信じていない。人間性というものそんなに変わるものじゃない。ヒステリーも人種差別も経済的圧迫も今だに残っている。われわれは現在、かつてないほど個人的にも、また集団的にも利己的になっているのではないか」——と述べている。

もしこういうことが再び起こるとす

れば、被害者はおそらく日本人の名前をもつた人々ではないだろう。目立つグループであれば、他の誰でも対象になる。無思慮の偏見がどういう結果を生むかということを理解したいすべての人に、ぜひ読んでもらいたい本である。

DoubleDay社発行(評者はアリテイシユ・コロンビア大学のジョン・ハウス助教。バンクーバー・サン紙より転載)

ピエール・バートン著

「カナダの五つ子」 (The Dionne Years: A Thirties Melodrama)

一九二四年五月二十八日、オンタリオ州北部カラングーの近くの農家で五つ子が生まれた。すべて女の子で、エミリー、マリー、セシル、アネット、イボンと名付けられた。五人の誕生は町医者ダフオーに世界的名誉を、そして両親(父オリバ・ディオーン、母エルジア・ディオーン)に苦悶をもたらし、子供たちの一挙手一投足に世界中の目がそそがれることになった。あまりマスコミが騒ぎ過ぎたため、子供たちはオンタリオ州政府によって法的に両親から引き離され、ダフオー養育病院に収容されることになった。州はやがて五つ子を利用した商品や五つ子に関する映画(「田舎医者」というハリウッド映画になった)などの契約料から上がる収入を貯える基金を設立した。この本は、ディオーン姉妹の誕生から今日までの生活を描いたものである。

著者によると、父親のオリバは、単純ではあるが、映画の中のような顔にしまりのないうすのろではなく、世界的大恐慌のまっただ中であって、どうにかや

りくり算段していたという。また五つ子を取り上げた医者のダフオーも、当時あまたの新聞雑誌に書かれたような神様のように親切でやさしい人ではなく、複雑粗野で、相手に恩をきせ、ふってわいた名声と富を味わいながら、社会的に素朴な田舎医者のイメージにしがみつくような人であつたらしい。

マスコミも、興業師も、政治家も、また一般大衆も、両親から五つ子を切り離した医者を支持し、五つ子は世間の好奇心の人質となった。父親は子供たちをわが家に取り戻そうと必死だった。第二次世界大戦が起きて五つ子に對する関心がうすれ、父親はようやく養育権を奪回したが、長い間家族から離れ、保母たちから手厚く扱われてきた子供たちは、もはや家庭という環境に適應できなかつた。

あれから三〇余年。関係者の大半はいまやない。五つ子のうち、エミリーとマリーも死んだ。イボン、アネット、セシルは健在だが、親族とは今だ疎遠だ。集まった多額の基金も、法的に五つ子を家族から隔離した費用などに当てられ、ほとんど底をついた。

これは善意のつもりでしたことが不幸に終わったという悲しい物語である。メロドラマを越えて、ただ「他人と違う」というだけでいかに人間が搾取されたかを訴える。McClelland and Stewart社発行。——(書評ハリリー・J・ボイル。マクリーン・マガジンより転載)

大使館図書室内

○森研三、高見弘人共著「カナダの萬藏物語(付、パイオニアの人達の素顔)」(尾鈴山書房 東京都新宿区中里町一八)



大阪商工会議所代表理事 三浦 氏

元大阪商工会議所代表理事の三浦氏に 博覧会国際事務局事務局長に

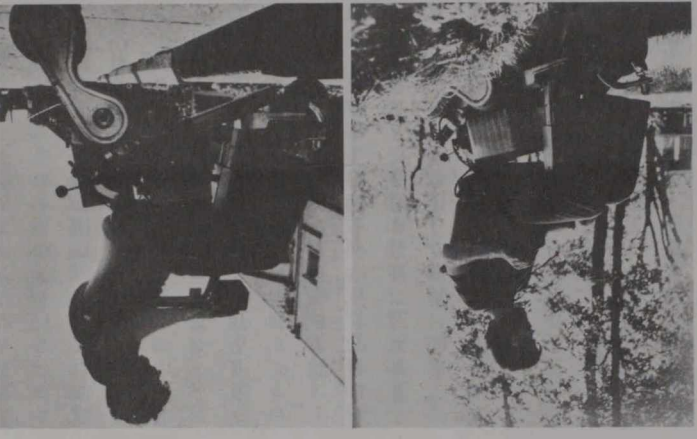
大阪商工会議所代表理事の三浦氏は、博覧会国際事務局事務局長に就任された。三浦氏は、博覧会国際事務局事務局長に就任された。三浦氏は、博覧会国際事務局事務局長に就任された。

博覧会国際事務局事務局長に就任された。三浦氏は、博覧会国際事務局事務局長に就任された。三浦氏は、博覧会国際事務局事務局長に就任された。

博覧会国際事務局事務局長に就任された三浦氏の要約

博覧会国際事務局事務局長に就任された。三浦氏は、博覧会国際事務局事務局長に就任された。三浦氏は、博覧会国際事務局事務局長に就任された。

博覧会国際事務局事務局長に就任された。三浦氏は、博覧会国際事務局事務局長に就任された。三浦氏は、博覧会国際事務局事務局長に就任された。



電気自動車を開発された。道や狭い通路も平気なコロボコで開発された。電気自動車を開発された。道や狭い通路も平気なコロボコで開発された。

電気自動車を開発された。道や狭い通路も平気なコロボコで開発された。電気自動車を開発された。道や狭い通路も平気なコロボコで開発された。